

# HB通信

編集・発行 /  
一般社団法人  
ひょうご部落解放・人権研究所



〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-25 兵庫人権会館2階  
TEL: 078-252-8280 FAX: 078-252-8281  
e-mail: blrhyg@extra.ocn.ne.jp URL: <http://blrhyg.org/>



## 所長の諏訪山だより

### コロナ禍でみえてきたもの

6月4日の参院財政金融委員会で、麻生太郎財務相は、新型コロナウイルス感染に対し、外出禁止など、海外のような法的拘束力のある対策をとっていないのに、人口当たりの死者数が日本で低い理由について、「うちの国は国民の民度のレベルが違う」と発言した。そして、9日には日本の死亡率の低さを「間違いなく誇るべき数字」と強調したうえで、「(日本と同じく死亡率の低い)韓国と一緒にせんでくださいよ。強制力なく、みんなで自主的にやったところが一番すごい。要請しただけで国民が賛同し、頑張った。国民としてきわめてクオリティが高い」と発言した。

麻生財務相が言うように、「国が要請しただけで頑張る国民」は、果たして民度が高いといえるのだろうか。「お上」の言うことに素直に従う国民ばかりだとしたら、民度は逆に低いのではないか。そもそも日本人の民度が高いのであれば、失言や妄言を繰り返す某政治家が当選を重ねることなどありえないはずだ。

麻生財務相が言うように、たしかに罰則付きの外出制限など、私権を制限する国や地域が多くみられた欧米に対し、日本では法的拘束力のない外出自粛要請に多くの人たちが従った。しかし、それは各自の自主的な行動だったのであろうか。

東京に住む父親から譲り受けた「練馬」ナンバーの車を利用している岩手県北上市在住の女性(49)は、市内のスーパーの駐車場で「コロナをまき散らすな」と怒鳴られたという。そのため車に乗るのが怖くなり、30分もかけて自転車でスーパーに行くようになった(朝日新聞夕刊2020年7月2日)。また、東海地方に住む40歳代男性は、家族が新型コロナウイルスに感染したが、その家族の年齢や居住する自治体名などの限られた情報が県によって発表された前日に、男性が住んでいる地域で感染者が出たとの情報がネット上で出回ったという。やがて家族や男性がネットで特定され、ネット上の掲示板やSNSに「毎晩飲み歩いていた」「パチンコ屋で見かけた」などの事実無根の書き込みが続いた(朝日新聞2020年6月30日)。

こうした「草の根相互監視社会」が人びとの行動を規制したのであり、決められたことは守ろうという同調圧力がこの規制をさらに強めたのである。新型コロナウイルス感染者は、医療的援助を必要とする病者であるにもかかわらず、バッシングされ、差別のまなざしを向けられる。これでは感染者が潜在化し、新たな感染が広がるだけだ。

今回のコロナ禍が浮き彫りにした私たちの社会の構造を直視していかなければならない。「民度が高い」と喜んでいる場合ではないのである。

所長 石元清英

はじめてみよう！

## 部落問題学習、考え方・実践のヒント (その1)

研究所では「これからの部落問題」学習プログラム作成研究会を組織し研究を重ね、2017年3月に解放出版社より『はじめてみよう！これからの部落問題学習——小学校、中学校、高校のプログラム』を刊行しました。うれしいことにご好評をいただき、この度2度目の増刷が決まりました。当欄では『はじめてみよう！』掲載の16のコラムを順次掲載し、部落問題の考え方のヒント、学習実践のヒントをご提供していきます。

### ▶『部落差別はもうなくなっている？』／井上浩義（兵庫県立加古川高等学校教諭（当時））

「寝た子を起こすな」と同じように、これもよく聞かれる意見です。

「なくなっている」というならば、いつなくなったのでしょうか。それは、国全体から？ それともあなたの町から？

ところで、部落差別と聞いたとき、具体的にどのようなことがらイメージされているのでしょうか。

部落出身者にぶつけられる直接的な差別行為、たとえば、あからさまに結婚差別をすとか、就職の際に排除すとか、賤称語を用いる…などでしょうか。

ある高校生対象の意識調査では、

○自分の周りではあまり人権問題を見かけないからかもしれないけれど、部落差別がこの日本でいまだに起こっていることが信じられません。

○かつて部落だった地域はあるけど、私は差別を見たことがありません。部落差別があると言われても、いまいちピンときません。

などの回答がありました。おそらくこのような回答をした高校生にとって、部落差別とは極めて露骨なものとして、とらえられているのでしょう。そうだとするなら、確かに見えないものなのかもしれません。

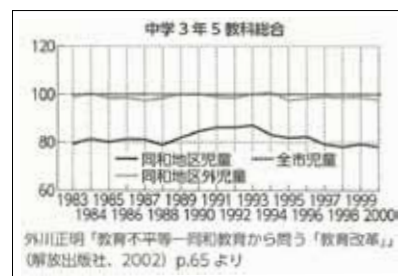
自分が直接見ることのできないもの、過去のものは「ないもの」になってしまいがちです。

しかし、部落差別は「見えるもの」だけではないのです。

右上のグラフは、 $\alpha$ 市の学力状況調査の結果です。5教科（国数社理英）、3,000人を対象にしたものです。全市平均を100という指数に換算し、黒線が部落の生徒たち、灰色線が同じ学校に通っている部落外の生徒たちです。外川正明さんは「高校進学率はほとんど格差のない状態になってきているのに、実質的な学力についてはこの20年間で解消していない……」と分析しています。この格差の存在は差別でしょうか。部落差別は社会構造の中に、生活実態のなかに存在するのです。

最近では、インターネット上で『部落地名総鑑』がオークション出品されたり、自由にダウンロードできたりするような事件が起きています。インターネットで「部落」で検索をかけてみると、どんな情報にヒットするのでしょうか。インターネット上にはいまでも、差別的な書き込みが絶えないのです。容易には削除されず、蔓延しているといっていいいでしょう。これで、部落差別はもうなくなっているといえるのでしょうか。

日常生活で頻繁に出会うことがないものであっても、それは「ない」ものではありません。意識的に見ようとする営みが求められているのです。



外川正明『教育不平等—同和教育から問う「教育改革」』（解放出版社、2002）p.65より



## 『戦争とトラウマ 不可視化された日本兵の戦争神経症』

中村江里著、吉川弘文館、2018年1月、4600円＋税

1995年の阪神・淡路大震災以降、日本でも一般的に使われるようになった「PTSD（心的外傷後ストレス障害）」が1980年、アメリカ精神医学の診断名に入った背景の一つはベトナム帰還兵の問題だ。日本兵のトラウマってどうだったんだろう、とずっと思っていたところに出会ったのがこの本だ。著者は30代の女性の歴史研究者。本書によれば、戦時期には国家的な関心を集め、精神医学の専門家による研究が行われた戦争神経症だが、戦争終了とともに忘却され、ほとんど研究が行われてこなかったという。それはなぜか、ということと、日本軍において戦争神経症がどう取り上げられてきたのか、が本書のテーマである。



戦時期の治療・研究の中心になったのは、千葉県こうのたけの国府台陸軍病院。2018年1月放送のNHK『隠された日本兵のトラウマ～陸軍病院8002人の“病床日誌”』は、国府台病院の医師（軍医）たちが、敗戦直後の軍の焼却命令に抗して残したカルテを元にしたドキュメンタリーだ。このカルテを分析した『うずもれた大戦の犠牲者』（1993年、浅井利勇）、それに触れながら兵士の精神構造を分析した『戦争と罪責』（1998年、野田正彰）、カルテの分析を通じて「精神障害」兵士について体系的に論じた『日本帝国陸軍と精神障害兵士』（2007年、清水寛編著）など、わずかな研究書はあるが、本書は、国府台以外の軍病院や、戦争でトラウマを負った元兵士の戦後にも光を当てた、初めての本格的な歴史研究書だ。

戦時中も戦争神経症兵士の存在がおおっぴらにされていたわけではない。むしろ、皇軍に恐怖・不安が原因で戦争神経症になる兵士がいるはずもないと隠されてきた。軍医たちも、その原因を戦争そのものではなく患者の先天的・後天的素因、「帰郷願望」「年金願望」だと考えていた。除役後も多くは傷痍軍人援護の対象にはならなかった。また戦傷や「立派な死に様」に価値が置かれる社会の中で、多くの兵士や家族もそれを内面化し、病気に対する恥意識を持っていた。

また、戦中・戦後の組織的な資料の焼却と隠匿によって、旧日本軍の戦傷病の全体像を示す統計すら残されていない。そもそも幸運にも日本に送還された兵士はごく一部に過ぎず、移送の困難や陸軍の「診療方針」などにより、発病した兵士のほとんどは戦場に取り残された。

本書の終盤（第4章）で著者は、①国府台病院の医師による元患者176人の20年後（1965年）の予後調査、②公文書館で保存・公開されている戦後の精神病院の入院記録、③戦争体験者を診療した医師の聞き取りについての分析をおこない、戦後の「精神障害」元兵士の姿を明らかにしようと試みている。①では、返信率の低さや、「今後一切このような連絡をしないでくれ」という返信が多かったこと、「未治群」が25%いること、②では、戦後に発病した元兵士が少なくないことなどが明らかにされている。③では、上官の命令で罪もない市民を殺してしまったことで苦しむ患者の話も紹介されている。戦後日本社会における戦争や軍隊への忌避感情が、日本軍兵士のトラウマを不可視化する一因であったことも4章では指摘されている。

2015年の安保法成立後の2017年に「海外派遣自衛官と家族の健康を考える会」が設立されたが、「戦争とトラウマ」は過去のものではなく、現在のリアルな問題でもあるといえる。戦後75年のこの夏、戦争が人間にどんな影響を及ぼすのかを改めて考えてみたいと思う。

この他に『最後の皇軍兵士』（1985年）、『さすらいの〈未復員〉』（1987年）、『忘れられた皇軍兵士たち』（写真集、2017年）など、戦後、家族に引き取られることなく療養所に残った元兵士取材したジャーナリストの本もあるので、機会があればご覧になっていただきたい。（H）



## 2020年度 人権セミナー

○申込・問合せは当研究所まで

2020年度の人権セミナーは、新型コロナウイルス感染症対策のため、開催を延期していましたが、内容を変更して開催することに決定しました。HB通信31号に掲載した第2回「食肉センター見学」は中止します。また、第1回「農地改革と部落」は開催時間を変更しましたので、お間違えのないようにご注意ください。

## 第1回「農地改革と部落——部落農家は小作地解放から排除されたのか」

○講師：石元清英（ひょうご部落解放・人権研究所所長／関西大学名誉教授）

○日時：2020年8月29日（土）**10:00～12:00**

○場所：兵庫県立のじぎく会館（201号室（定員60人））

○参加資料代：【一般】1000円／【正会員】無料／【賛助会員・定期購読・学生】500円

農地改革において部落の小作農の多くは、小作地の解放から排除された——1980年代ごろまでの部落問題研究の分野では、これが定説となっていました。しかし、これはまったく事実ではありません。セミナーでは部落で農地改革がどのように行われたのか、その実態を明らかにし、どうして上記のような誤解が生じたのか、そして、その誤解がなぜ定説となってしまったのかについて考えます。

第2回「いま、部落問題を語る  
——新たな出会いを求めて」(仮)

○日時：10月3日（土）14:00～16:00

○講師：山本栄子（『歩——識字を求め、部落差別と闘い続ける』著者）

山本崇記（静岡大学人文社会科学部教員）

○場所：のじぎく会館（201号室）

## 第3回「日本の戦後体制と在日コリアン」

○日時：12月12日（土）14:00～16:00

○講師：水野直樹（京都大学名誉教授）

○場所：のじぎく会館（101・102号室）

## 第4回「同和対策事業から平等を考える」

○日時：2021年2月6日（土）14:00～16:00

○講師：柴原浩嗣（大阪府人権協会事務局長）

○場所：のじぎく会館（101・102号室）

## 人権啓発研究第41回兵庫県集会

○日時：2020年11月28日（土）13時～16時

○開催形式：リモート配信、サテライト会場（県内隣保館等予定）での参加

○参加費：無料

○申込受付：2020年10月1日～（予定）

○集会内容：

◇シンポジウム「新型コロナウイルスによる差別について」（仮題）

## パネリスト

安田菜津紀さん（フォトジャーナリスト）

小林丈広さん（同志社大学教授）

中部剛さん（神戸新聞記者）

## コーディネーター

宮前千雅子さん

（関西大学人権問題研究室委嘱研究員）

## 事務局から

- 現在、コロナショックで新しい生活と古い生活が混在しているが、ひょっとしたら大化の改新でもこんな感じだったのだろうかと思う（Y）
- 私は電車で長距離通勤をしており、新型コロナ感染リスクはかなり高いと思っています。重症化リスクも高いほうなので、終活のようなこと？を少ししています（Ka）
- 韓ドラ「愛の不時着」は、韓国の女性実業家と北朝鮮兵士のラブストーリー。女性がパラグライダーで軍事境界線を越え北朝鮮に不時着するという設

- 定だ。こんなにも近いのに、あまりにも遠い二つの祖国。南北に離散した多くの家族に思いを馳せる（K）
- 母になり、母のありがたみをひしひしと感じています。そして、ちっこいちっこい娘ちゃんがただただ可愛くて仕方ない♡そんな毎日を送っています（ひ）
- covid-19感染拡大の中、在宅勤務、オンラインの会議に飲み会…。なんだ、結構いろいろできるじゃん。これまでの思い込みも変わっていく。同時に、このウイルスに人間や社会の在り方が根本から問われている、という言葉に深くうなずく（H）